

森立之の生涯十

森立之と楊守敬

森立之(1807～1885)

明治維新前が森立之がもつとも輝かしい業績を上げた時期だということを、何回にわたって繰り返しお話しし、前はそうした業績もプライドも無残に砕かれた維新後の、漢学・漢医学界の人々の航跡を見ました。

実際にこの当時の立之は、プライドをひどく傷つけられ、飲めなかった酒も飲むようになり、同じく弘前から上京してきた澁江保を相手に、さんざん愚痴をこぼしていたようです。

酒も晩年へ大酒になつて、猿のやうな眞赤な顔をして、湯呑で阿ほり、そして大氣焔を吐くのが常で阿つたと思はる。

島田篁村(重礼)翁の話に(此の話は、枳園が七十六七歳の時の事なり。)

旧福山藩主阿部伯(正桓)は、自分の門人で阿る。一日、其の誕辰〔誕生日〕の祝ひに招かれて本所横網の邸へ往くと、最前から枳園が来て居て、大氣焔を吐き、動もすれば「どうかすると」正桓を叱咤する其の状ハ、毫も昔の君臣らしい所がなかつたとぞ。

(澁江保「森枳園傳」17葉)

しかし、明治十四年一月(1881)、楊守敬^{まうしゅけい}(1839-1915)という清国の文人が立之のもとを訪れます。この人は、清国駐日大使・何如璋^{かじよしまろ}※(1838～1891、1877年初代駐日公使となり三年間在日)の随員として明治十三年に来日した人物で、清国大

使に従って日本へ来たほどの人ですから、清の士大夫、すなわち貴族です。もともとは金石学といって、金属器や石碑上の銘文、あるいは貨幣・古印そのものの研究に通じた人でした。しかし、来日当時には書誌学にも開眼し、中国本土で亡失した書籍が日本に多く残っていることを知るようになりました。ですから、日本に渡ってきた目的は、自国で失われた書籍を日本で買い戻すことだったのです。

※何如璋：自身も高名な文人だったため、日本の文人墨客の多くが私的交流を求めて訪れた。帰国後は福州船政大臣に任命されたが、清仏戦争時の馬江海戦で砲声に驚いて逃亡してしまった。これにより二隻の艦艇を失い、七百人の兵が死亡し、馬尾船廠を破壊されるという損害を出したため、責任を問われ免職となった。



楊守敬は一万数千といわれる膨大な拓本・法帖・古銭・古印などとともに来日し、日本では一年足らずのあいだに三万巻あまりの書籍を集めたといえます。その手引きとなったのが、澁江抽齋と立之が編集した「経籍訪古志」でした。

● 経籍訪古志について

ここで「経籍訪古志」に触れておかなければなりません。森立之の業績として「素問攷注」や「傷寒論攷注」、「神農本草經」とならんで、いま一つ触れておかなければならないのが、この「経籍訪古志」です。書物は少し目を離せば、瞬く間になくなるものと見えて、江戸の蔵書家たちは書籍の逸散に心をいためました。なかでも蔵書家が死ぬと、とたんに本は無くなったので、森鷗外が「一箇の畔大漢で便々たる腹を有していたらしい。また美丈夫でもあった」（『伊澤蘭軒』その百十五）と記している狩谷棧斎は、抽齋と立之に命じて日本に現存する書籍の目録をつくらせました。

……卿雲（狩谷極齋 1775-1835）の女とする所、則ち又迷庵市野光彦の若
き有り、寶素小島君學古及び伊澤蘭軒の若き有り、上下その議論を
相ひ與どもにし、而して藏書もまた皆な頗る富む。惜しむらくは諸老先
生（前文に出ている吉田篁墩 1745-1798、狩谷極齋）は相ひ繼いで道山に歸り、
而して收儲しうちよせる所の各種古本は、學者、その面目を髣髴ほうふつせんと欲す
るも得ること可ならず、憾事かんじ（うらみ）に以爲おもわざる莫し。卿雲に従ひ
て遊ぶは澀江道純、森立夫、並びにその指授（伝授）を親受し、鑿識さくし（鑑
識）の明つみを具さに有す。而るに苙庭丹波君、また柔（親しみやすい）にして、
また嘗つねに卿雲と交わること最も親し。深く書の存佚、顯晦けんかい（はつきり
していることと曖昧なこと）の數々有るを慨あはき、則ち今に追んで之を収録し、
以て學者に貽のこさしむ。庶幾こいねがはくは、以て舊本の面目を見はすに足ら
むと。それ亦た諸老先生の志なり。夫れ遂に道純立夫及び小島君抱
冲しやうしよう（寶素の長男）を慇懃せんせい（まわりから勧めはげます）し、目錄を撰成せ俾しむ。是
に於いて相ひ與こつきよに舊聞を考据（根拠をあげて証明する、Ⅱ考証）し、經籍訪古
志六卷あらはを著し爲す。

卿雲所友則又有若迷庵市野光彦、有若寶素小島君學古及伊澤蘭軒、相與上下其
議論、而藏書亦皆頗富、惜諸老先生者相繼歸道山、而所收儲各種古本者、學者
欲髣髴其面目而不可得、莫不以爲憾事焉、從卿雲游者澀江道純、森立夫、並親
受其指授、具有鑿識之明、而苙庭丹波君亦柔、亦嘗與卿雲交最親、深慨書之存
佚顯晦有數、則追今爲之収録以貽學者、庶幾乎足以見舊本面目、其亦諸老先
生之志也、夫遂慇懃道純立夫及小島君抱冲、俾撰成目錄、於是相與考据舊聞、著
爲經籍訪古志六卷

是の書、編録の發端は狩谷掖翁在りし日に於り。凡そを辨つに鈔(書をうつす)刻(版木をほる)の源委(もととすえ)は流別し、之れ其の指授を得る者も多爲り。厥後(その後)小島君寶素、また屢々搜討(調べ求める)を加うるも、而るに仍ほ未完たり。丹波菑庭先生、深く古本の日々湮(かくれる)晦(くらい)に就くを慨き、余ら二人を督促して亟に斯に従事せ俾む。復た寶素君嗣子抱冲君を獲、以てその得る所は庭聞下の者の陳上を聞くとし、互ひに相ひ攷(かんがえる)覈(しらべる)し、用功の精密たる、毎々倍蓰(数倍、五倍)す。余ら二人、故を以て久しからずして緒に就く。・・・前後凡そ稿は、三易を盡して(三度書き換えて)始めて釐(おぎ)まり、六卷と爲る。その讎校(しうこう)二人対になつて行なう校正の勞は則ち堀川未濟、與に力有り、その題目、經籍訪古志は菑庭先生の命くる所なり。

是書編録發端於狩谷掖翁在日、凡辨鈔刻之源委流別、得之其指授者爲多、厥後小島君寶素、又屢加搜討、而仍未完、丹波菑庭先生、深慨古本之日就湮晦、督促余二人者俾亟從事于斯、復獲寶素君嗣子抱冲君、以其所得庭聞互相攷覈、用功精密、每倍蓰余二人者以故不久就緒、・・・盡前後凡三易稿始釐爲六卷、其讎校之勞則堀川未濟與有力焉、其題目經籍訪古志者、菑庭先生所命、

いくら掖齋の命令でも、抽齋と立之の二人にとって完遂までは遠い道のりでしたが、それでも多紀元堅の督促が追いかけてきたので、小嶋寶素の子・抱冲も協力することになりました。そして安政四年(1857年)、ようやく稿は成りました。稿を改めること三度にして「經籍訪古志」六卷は完成したとあります。

全国的な調査をどのように行なったのか明確には分りませんが、狩谷極齋という人は、生涯に四度、関西、広島にまで足をはこんで、碑文や社寺に蔵されている文書や古書籍を調査しています。また京都の宮廷人、医家の門人となって、家蔵の古書籍を筆写しています。そうした成果をこの「經籍訪古志」として抽齋・立之にまとめさせようとしたのだと思われます。

しかしこれは日本で印刷されることはなく、小嶋抱沖、森約之(立之の子)と抽齋の三人が、それぞれ写しを持つに止まりました。明治十八年になって、清の姚子梁がこのいずれかを得て自国で刊行したのです。

立之を尋ねた楊守敬も、写しを一本持っていました。誤りの多い盗写本でした。楊守敬は、立之にこの校正も依頼しましたが、それよりも狙いは、この「經籍訪古志」の編者である立之に、日本に現存して清では失われている書籍を集めてもらい、買い取ることでした。

明治十四年一月、楊守敬は客として立之の自宅を訪れました。意思の疎通は筆談でしたので、立之は両者の書いたものを「清客筆話」と題して残しておきました。これは現在、慶応義塾大学に所蔵されています。

この中から、二人がどんなやり取りをしたのか見てみましょう。

明治十四年一月、清の文人・楊守敬(ようしゅけい)が、書籍を買い取るために立之のもとを訪れました。両者のやりとりは筆談です。これを見ると、楊氏がいかに購書に熱を上げていたかが分ります。



楊「問ふ、先生小學に精しく、収蔵せる古書も甚だ富むと。特に拜謁に来たり」

森「今已に大半を估却し、珍書は多く有さず。只だ九世の醫業なる故

に經史の類尤も少し。七十五年の今日、子孫共にする無く、已むを得ずして貧なる小官を是れ務と爲す、赧然々々(恥じて顔を赤らめる様)」

楊「問、先生精小學、收藏古書甚富、特來拜謁」

森「今已大半估却、珍書不多有、只九世之醫業、故經史類尤少、七十五年之今日子孫共無、不得已而爲貧之小官是務、赧然々々」

今は貧をかこつ身で、經史の類は持つていないのだと言う立之の言葉も意に介さずに楊氏は言います。

楊「問ふ、宋本玉篇・廣韻(玉篇・廣韻ともに辞書)は有りや」

森「官庫に收藏し、今は家に在らず」

楊「見むと求む」

森「能く備えざらば今日は披覽せず、他日、携え來らば、而る後に書を以て報ずべし」

楊「其の他、太平御覽は有りや」

森「曩者、喜多邨榜窗(喜多村榜窓※)、清舶(舶來)の翻宋本に據り活字

印刷す。時々此の本を以て校す。標記の切斷さるは、當時の校讎や。皆な活板様在り。故に、此の本の標注は無用の者と爲す」

※喜多村榜窓・・・喜多村直寛 文化元年(1804)〜1876) 江戸時代末期の幕府医官。名は直寛、字は子栗、号は龍尾・榜窓など、通称は安齋、安正。幕府医学館考証派の重鎮。

「身分は准判官御用掛で、月給四十圓であつた。局長得能良介は初め八十圓を給せようと云つたが、枳園は辞して云つた。多く給せられて早く罷められむよりは、少なく給せられて久しく勤めたい。四十圓で十分だと云つた。局長はこれに従つて、特に着宿として枳園を優遇し、土藏の内に畳を敷いて事務を執らせた。此土藏の鍵は枳園が自ら保管してゐて、自由にこれに出入した」

(濠江抽齋 その百一)

明治十四年十月には「太平御覽」^{たいへいぎょらん}（宋代に編集された総合全書）のことで楊守敬がやってきます。楊氏がいかに執拗に立之に食い下がったかが分るやり取りです。

楊「抄本の『太平御覽』ですが、友人の黄君※がこれを購いたいと言っております。但し六十円で購えればということで、もし先生(立之)が厭でなければ、明日六十円を持って取りに来ますが」

森「この書は断然、売らないと決めています。千金といえども売りません。板本(印刷本)はだめな本ですが、抄本(手書きの本)はまともな本です。売ることはいけません」

楊「板本は抄本をもとに作っているのに、なぜダメ本なのでしょうか？」

森「悉く是ならず、というわけではないのです。校訂を加え、間違った文字を改めればよい本になりますから、このままでは駄目だと言ったまでのこと。まあ世間では、こうした駄本でも売れるでしょうが」

楊「黄君はこのことを知りません。彼は流通している板本の値がはなはだ廉価であると知っておりますので、先日約束した百円では高いと考えています。いま先生の話聞いて、板本にも多く改正が必要と知りました。しかし先日の約束によって百円と決めました。私はこの値段で、黄君の頼みを叶えようと思っていたのに、先生は今日になって約束を覆して、しかも私に怒ってくれるなどいう。間に立っている私の苦勞も考えてほしいのです」

森「今は売らないと決めた。過日の売却の話はもう一旦終わったことで、これは違約とはちがう。察してくれたまえ」



楊「この本は黄君の欲するもので、私が欲しいと思っているわけではないのです。それに加えて、彼はお金まで持って来ている。書を買いたいというのは彼の頼みですが、その彼は六十円だと思っていて、しかもその本を見ていないが、当然本を手に入れられるものと思っ待っている。先生の話聞いて、私自身は釈然としましたが、先生は六十円という値を聞いて、遂に怒ってしまった。私はどうしたらよいのですか」

森「日本人は、いったん金を受け取った後は違約しない。今は、金の受けとり

前だから、心に従って売らないことは可だ。且つ、この書はまたとない書だ、
売らないと言ったら売らない。値の高下ではないのだ、もう怒^{おこ}してくれ」

最後にはとうとう立之の泣きが入つて、この日の交渉は終了しました。しかし
「太平御覽」のことはこれで終わったわけではなく、十一月十四日になつて、
また楊氏はやつてきます。



楊「『太平御覽』が百円という約束でしたが、数日中にお金を持ってきます」
森「先日、売らないと決めただろう。たとえ千金でも駄目。前回の通りで、今
日も気持ちは変っていない」

楊「私から至極珍品の古刀布銭を先生に差し上げましょう。お断りなさらな
いでください。『太平御覽』のことは、すべて先生が気持ちを変えてくれること
にかかっているのです。そうでなければ、私は黄君に合わせる顔がない。どう
ぞ、私を憐れんで下さい」

森「大事な書物は、日ごとに亡び、月ごとに失われてゆく。日本国内から金銀
が失われてゆくのが同日の談だ。ただ金銀は紙幣をもって代えられるが、大事
な書物はひとたび失われれば返らないのだ、嗚呼」

楊「貴国の原本の話がすれば、まだ印刷されておらずに、二部が残つておりま
す。わずかに一部だけが残つているという話ではございません。先生も古の情
の分るお方ですし、私も同じです。私とても、これを得て再度校正したいので
あつて、利のためではありません。そこを諒として頂きたい。且つ、私に力が
あつて購おうとしているのでなく、黄君の力によつて購ひ、校正しようとして
いるのです」

森「この話は始めから分かっていることではないか。今日に至るも売らないと
決めている。断然として石の如しだ。これは私の癖だ。楊先生は幸いにして、
宥^{なぐさ}の心のある方だ。それに未版の原本が二部、日本に有るといつたところで、
俺のものでもない。隣の宝だよ、俺に益はない」

ここへ来て、我々にもこの抄本「太平御覧」が官庫の書籍であることがはつきりしました。楊氏とて、それは分っていたはずですが、それをどうしてもこうしても売ってくれと振じ込んでいるのですから、駄々っ子のようなものです。ところが年が明けて十五年、立之から楊氏に手紙が来ます。

〈爾来、拝顔していませんが、近況は如何ですか。「太平御覧」は割愛することとは必竟難しい。が、私の方で家の建築費がかかるようになって、どうにもなりません。約束が違ふことになったが、遂に沽却(売却)する次第に至りました。昨今は貧の極みで、紙幣の授与されるころがあればと祈っております。明日なら、いちばん都合がいいのですが、来月では不可です。先生、萬意を察して明日の晩、ご来車(人力車で来る)下さいませんか〉(この手紙は「壬午睡餘録」より)

ひどい話です。官庫の本を売って、家の建築費に充てようというのです。立之の馬脚がまた現れたのです。

※ 黄君…^{うわうけい}黄遵憲(1848～1905) 清朝末期の詩人・外交官・政治改革者であり、また知日家としても知られる。何如璋に従い、参贊(書記官にあたる)として明治日本に同行した。日本政府の要人のほか、日本の文人とも深い交流があり、元高崎藩主^{おおこうちてるな}大河内輝声との筆談録は七十一冊にも上るといふ。1882年より三年間サンフランシスコ総領事。1887年「日本国志」。1890年イギリス・フランス・ベルギー・イタリア兼任公使として赴任する薛福成(せつぷくせい)の参贊としてヨーロッパに赴任。1891年シンガポール総領事として赴任。日清戦争(1894～95)のさなかに帰国するが、自国の敗戦に衝撃を受けて、清も日本にならって富国強兵に専念すべきで、そのためには国内の教育を改革しなければならないと唱えて奔走したが、報われなかった。



楊守敬の購入した古典籍のその後

守敬の日本で獲得した古典籍のほとんどは、現在では台湾国立故宮博物院図書館（觀海堂文庫）に保存されており、小嶋寶素の旧蔵本を中心に、医籍は格段の充実振りを見せているという。また帰国した1884年（明治17年）に『^{いっ}聿脩堂叢書』として多紀元簡の『素問識』『傷寒論輯義』などの計十三種、六十九巻を発刊している。これには日本で森立之に交渉して、版木を四百円で買取るなどしている。
〈小曾戸洋『漢方の歴史』大修館書店より〉

